

岡部光明ゼミナール 2010年度春学期

研究論文「概要」集



明治学院大学 国際学部

岡部光明ゼミナール 2010年度春学期

研究論文「概要」集について

この冊子は、明治学院大学国際学部における岡部光明ゼミナール所属学生の2010年度春学期タームペーパーの概要（目次および主要図表を含む）を印刷したものです。このようななかたちでゼミ生の研究成果を刊行するのは過去4回実施しているので、本冊子は第5号になります。これらのタームペーパーはすべて研究成果発表会（2010年7月17日-18日、湘南国際村で実施）において報告され、そこでの議論を踏まえて改訂されたものです。

この冊子を刊行する目的は、従来と同様（1）個々の学生が手がけた研究の内容を残すこと、（2）ゼミ生がお互いに研究テーマを知り合うことによって問題意識向上させること、（3）今後岡部ゼミを志望する諸君にとって参考にしてもらうこと、などにあります。

タームペーパー執筆を求める四つの理由

岡部ゼミでは学期毎にタームペーパー（学期論文）の執筆を義務づけていますが、それは各履修者に興味あるテーマについて掘り下げて勉強してもらう機会を与えるだけでなく、研究論文として国際的に共通する「型」をしっかりと身につけてもらうことを大きな意図としています。その場合、とくに重要なことは次の四つです。

第一に、論文の「タイトル」（表題）が問題意識、分析手法、そして結論の方向を示唆するものになっているかどうかです。表題は、いわば論文の最も短い要約であり、論文の顔ということもできます。限られた字数の表題にそれらを盛り込むことがとても大切であり、タームペーパーを書くことによってその技量を磨いてほしいわけです。

第二に、論文の構造が明確なものとなっているかどうかです。論文の構造はほとんどの学問分野に共通する「型」があります。その型とは（1）序文において問題の背景、研究手法、論文の構成を述べる、（2）本論では従来の研究を展望するとともにそれに批判的検討を加え、論文独自の分析を詳細に記述する、そして（3）結語の部分ではその論文における発見ないし論文の主張を要約するとともに、残された課題を記載することです。学術論文の本体は、どの学問分野においても基本的にこのような構成にする必要があり、これが学術上の国際標準になっているわけです。論文がこういう構造になっているかどうかは、その目次をみればすぐにわかります。この概要集において「目次」の記載を求めているのはそうした理由からです。

第三に、研究内容の主要点が論文の冒頭において簡潔にかつ要領よく書けているかどうかです。研究論文では、その冒頭に必ず概要（要旨、アブストラクト）を付けることが現在では国際的に共通する約束ごとになっています。このため、限られた文字数で密度の高い概要を書く技量を修得してもらいたいと考えています。概要が的確に書けているかどうかは、その論文の完成度を測る一つの尺度であり、それは大学院生あるいは研究者にとっても挑戦的な作業です。

第四に、論文における基本用語が適切に定義できているかどうかです。どのような論文においても、そこで最も重要な用語ないし概念が幾つか必ずあります。キーワードと称される言葉です。それがどういう意味を持つ用語なのかを論文の初めの部分で明確かつ適切に規定ないし定義しなければなりません。これは学術論文としての基本的な要請です。基本用語が定義できていない論文は、論文の内容があいまいなものになる場合が多く、科学的な姿勢に欠けるといわれても仕方ありません。このため、ゼミ生諸君が書くターム一ペーパーにおいては、キーワードを（概要の下方に）明記するとともに、それらを文中で定義することを強く求めてきました。ここに収録した

概要の文章においてもその精神が生かされていることを見取っていただけたと思います。

以上四つのことは、私が学部生のゼミだけでなく、大学院生のための「国際学基礎演習」（修士課程1年生の春学期必修科目）においても当然のことながら重視していることです。

型を身につけることの重要性

以上、論文執筆において「型」を身につけることの重要性を述べました。実は、型を修得することは、論文執筆の場合に限らずどのような分野においても基本的に重要な要請なのです。なぜなら、型は長年月を経て磨かれ、洗練されたいわば知恵の結晶だからです。型を重視する効用は一般的に三つあります。

第一に、型に従うことによって物事がよく整理でき、無駄がなくなり、そして本質的なことを効果的に伝達することができるようになることです。茶道、柔道、あるいは各種の儀式を想起すればこのことが理解できると思います。

第二に、どのような型で対応するかを悩む必要がなくなるので、より本質的なことがら（内容）に集中することができることです。俳句は五-七-五の十七音による定型詩ですが、五-七-五以外の十七音の組み合わせを考える必要がないので、詠う内容をこの型に入れることだけに集中すればよいわけです。また作曲家モーツアルトの交響曲や協奏曲の場合、第1楽章は軽快なアレグロによるソナタ形式、第2楽章はアンダンテの緩徐楽章、そして第3楽章は再び軽快なソナタ形式という基本型があります。つまりモーツアルトは、曲毎にどのような形式にするかを一々考える必要がなく、曲想に集中することができたといえます。

第三に、型に習熟することによって初めて大きな飛躍が可能になることです。例えば、画家ピカソの絵は従来の絵画からみると「型破り」ですが、これは彼が若いときに絵画の基本型をしっかり身につけていた（これが彼の作品かと疑いたくなるほど見事な写実的絵画を描いていた）からこそ可能になったはずです。型をマスターしていなければ、そもそも型破りをすることができないわけです。

今学期のタームペーパーは、上記四つの観点（適切な表題、明確な論文構造、簡潔かつ要領よく書けた概要、基本用語の適切な定義）に照らした場合、学部学生が一学期間に書く研究論文としては、概して良い作品になっていると感じました。

秋学期には、今学期の成果を踏み台にしてさらに飛躍してほしい。とくに4年生は、今学期までのタームペーパーの内容を上手に統合するないし発展させるとともに、秋学期に新たな研究を付け加えるかたちで立派な卒業論文を完成してください。大いに期待しています。

2010年7月26日

明治学院大学 国際学部教授

岡部 光明

<http://www.okabem.com>

目 次

演習 3 (4年生)

- ・明治期日本における産業化：その要因と途上国への教訓（上岡 咲紀） 10
- ・日本の少子化について：その原因・影響・対応策（日高 歩） 12
- ・企業の社会的責任（CSR）の意義と課題（藤崎 佳菜） 14
- ・企業からみた環境問題の変容と求められる経営戦略（藻垣 静香） 16
- ・環境保護における企業の社会的責任の重要性：持続可能な社会の実現（渡辺 沙織） 18
- ・中国の霸権と東アジアの安全保障（山田 真史） 20

演習 2 (3年生)

- ・平成バブルの発生、崩壊とその原因、及び教訓（石川大起） 24
- ・欧州中央銀行の概要と政策運営（石川 恵） 26
- ・日本の年金制度における給付と負担：フランスの制度との比較を通じて（上原 彩） 28
- ・循環型社会：環境と社会システム（菊池 貴彬） 30
- ・長期的にみた原油価格上昇：その背景と対応策（菊池 亮佑） 32
- ・原油価格高騰による影響と対応策（島野 多佳子） 34

岡部光明ゼミ 研究報告会

—2010年7月17日-18日、於 神奈川県 湘南国際村—

